

六十周年記念座談会

「研究所十年を振り返り，未来を語る」



右奥から時計回りに，高橋継男，村松薫，松本誠一，後藤武秀，萩仁平

(後藤) 本日は先生方お集まりいただきましてありがとうございます。今日お集まりいただきました趣旨は，アジア文化研究所の過去10年程度の活動を振り返り，その問題点をご指摘いただき，かつ全員で討議しながら，将来に提言できるようなものを皆様からいただければと思った次第です。ご自由にご発言いただきたいと思っています。

今日お集まりいただきましたのは，この10年の間，研究所の所長として運営にご尽力いただきました先生方，さらに，国際化という問題で中国との関係で様々な活動をしてこられました先生，それと，私どもの活動は，どうしても海外との関係が深くありますので，チケットの手配・ホテルの手配など，いわば，私どもの活動を下支えしてくださっています，旅行社の方です。簡単ではございますが，お一方ずつ，自己紹介をお願いできればと思います。まず，10年前からでしょうか，所長をなさいまして，すでに大学を退職されました高橋先生からお願いします。

(高橋) 高橋です。私が所長を担当したのは，2010年の4月から2014年の3月までの4年間でありました。2015年の3月に退職しましたので，いま退職してから4年で，東洋大学の現

役であったのはだいぶん昔の話になっておりまして，記憶も定かではないです。ちゃんとしたお話ができるか心もとなく思っている次第であります。

(後藤) ご専門は。

(高橋) 私は歴史学の方面で，特に東洋史学，またさらに細かくいいますと，中国史の古い時代，唐の時代を勉強しておりました。今もしているつもりです。

(後藤) ありがとうございます。それではお座りになっている順序でいきたいと思います。悠々トラベルからお越しいただきました村松さんをお願いいたします。

(村松) 悠々トラベルから参りました村松と申します。先生方の海外渡航の航空券の手配などでお手伝いさせていただいております。もう歳になりましたので，今後どのぐらい続くかわかりませんが，続く限りお手伝いをさせていただく所存でございますので，どうぞよろしくをお願いいたします。

(後藤) 今日はお忙しい中ありがとうございます。それではこちらに移りまして，松本先生をお願いいたします。

(松本) 松本です。わたしは東洋大学社会学部，大学院を経て，博士前期課程・後期課程という前の，博士課程を終えて，まだ職がない1979年4月からすぐ本研究所の前身であるアジア・アフリカ文化研究所の研究員にいただきました。それからですから，ちょうど40年になります。専任教員になるまでの間アジア・アフリカ文化研究所の研究員という肩書が非常に支えになっていました。

また，韓国研究を大学院のころから始めていましたので，この研究所でも韓国なら松本さんということになり，いろいろ育てていただいたところがあります。ですから非常に恩を感じています。高橋先生の後，2014年4月から2018年

3月までの4年間所長を務めさせていただきました。

(後藤) ありがとうございます。社会学部の社会文化システム学科ですね。それではその次、郝さんをお願いいたしますでしょうか。

(郝) 私は郝仁平と申します。中国の出身です。東洋大学に来る前に、東京理科大学短期大学というところに勤めておりましたが、2004年に東洋大学に赴任しました。まだ赴任する前のことですが、本研究所研究員で経済学部教授の阿部先生から電話がかかってきて、「中国の西部大開発に関するプロジェクトを立ち上げるので、是非参加していただきたい」というようなご連絡をいただきました。2004年の赴任後すぐアジア文化研究所の研究員になりましたので、それからもう早くも15年ぐらい経ちました。

現在は経済学部の国際経済学科に所属しております。専門分野は開発経済学です。主に開発経済学の理論を用いて中国経済及び日中の経済を比較しながら経済発展を様々な角度から研究しております。アジア文化研究所につきましても、もう10年以上さまざまなプロジェクトに関わってきております。共同研究が自分の研究にもかなり役に立ったという点では非常に感謝しております。今日は所長の計らいにより自分も比較的若いというか、もう若くないんですが、参加させていただきます。よろしく願いいたします。

(後藤) よろしく願いいたします。最後に私、後藤ですが、松本先生の後を受けまして2018年4月から所長を務めさせていただいております。今年が2年目になります。法学部法律学科に所属しております、東洋大学に着任いたしましたのは1991年です。アジア文化研究所に研究員として参加いたしましたのは多分その1年か2年後だっただろうと思います。

当時法学部からこの研究所に参加している教員というのは全くおりませんでした。全然わからないところだったんですが、松本先生が当時所属していらっしゃいました研究チームに迎えてくださりまして、今に至っております。なんとか歴代の所長の先生方の後を受けて、なか

か発展は難しいのですが、後退しない程度に進めていけたらなというふうに思って務めてまいりました。



先生方それぞれに簡単な自己紹介をしていただきました。最初に申し上げましたように、これまでの活動を振り返りながら、将来に向けてどういう方向をとることが可能であるかという点について様々なご意見をいただき、それを運営委員会ないしは総会に諮って次年度以降の発展の礎にできればというふうに考えています。

研究所を運営する上でいくつもの問題があることは確かなんですが、いくつかちょっと私の方でメモさせていただきましたものがございまして。一番の問題は、研究所活動が一体性をもって行われているかという問題を常に抱えているという点です。外部評価などを受ける際にもこの点の問題にどうしても入らざるを得ないところがございまして、そこですら話の入り口といたしまして、高橋先生、松本先生はすでにこの所長を終えられて数年経っておりますので、逆に振り返っていただくには客観的に見るができるのではないかと思いますので、高橋先生からですみませんが、2010年から2014年までの在任中、いま思い出されて、こういう活動をしてきた、こういう点に問題を抱えてきたというような、いってみれば活動概要というようなものをお話しいただければと思います。

(高橋) 私が所長を担当しました2010年4月からの4年間というのは、アジア文化研究所にとっては、なんといいましょうか、私が所長になる直前に先程の話に出ましたでしょうか、大

型プロジェクト、正確には、学術フロンティア、そのあと戦略的研究基盤形成という名前で続いたようですけども、それが終わった直後だったんですよ。ですから今申し上げた学術フロンティアが5年間、そして延長期間の3年を終了したところでした。これは、2002年から始めて2010年3月まで、その大型、まさに大型、2億を超える予算を獲得して、事実上アジア文化研究所を基盤に研究センターを組織して、研究が進められました。ということで、私が研究所長になった年はいわば一休みとか次に向けて力を蓄えていこうという、そういう時期だったんじゃないかと思います。とはいいながら、私が所長になる数年前に研究所改革なるものが行われて、従来の東洋大学の研究所の体制が本当に大きく変わったという影響を受けて、先程後藤先生がおっしゃったような問題がその時からすでに起きているという状態でした。あとでもうちょっと具体的に言いますけれども、そういう問題を抱えながら、次のステップに向けて力を蓄えていこうという時期ではなかったかと思えます。

とはいいつつも、先程言いましたように、大学はのんびりさせてくれませんので、常にこの研究所を金がかからないようにしようと、予算を削減しようという圧力にずっとさらされていたように思います。力を蓄えていこうという時期は、活動を活発化させるための準備期ということなんですけれども、先程から出ているような大きな問題がありました。研究員は専任教員であるのですが、研究所改革の結果所属された教員の中にはあまりアジア文化研究所に所属したいという感じを持っていない方も見受けられました。当時2つの研究所に所属できますという規定になったために、2つ所属しなければならないという人も出ました。やる気はないんだけど名前があって登録するという人が結構多くなったというのが、この研究所改革の大問題でした。その問題が今も続いているわけです。その結果、研究員が56名、客員研究員が60名、院生研究員2名、合計118名の在所帯となりました。これは私が所長を辞める時の人数ですけれ

ど、100名を超える在所帯にもかかわらず、日ごろアジア文化研究所の活動に本当に参加しているという人が極めて少なかったです。名前だけという人が多かったんですよ。

それをなんとかしようということで、研究班活動というものを充実させなければならないのではないかと思いました。つまり研究班のリーダーになってくださる方に運営委員も担当していただいて、テーマを決めて研究班活動を活性化していただくということに力を入れました。思うようにうまくいきませんでしたけれども。それを土台にして、大学のプロジェクトなり、あるいは科研費を申請していただくというような活動を展開する中で、次の大きな、外部資金獲得などに繋がるような活動になっていけばいいと考えておりました。

(後藤) 確かにちょっと、力をためるというような時期でしたね。

(高橋) そうなんです。

(後藤) 皆さんでやりました学術フロンティアというのは本当に疲れる仕事でした。なにが疲れるかと申しますと、報告書作りが疲れるのです。報告書ばかり作っていた気がします。先生はその後を受けて、少し活性が落ちていた時期に所長をお努めいただいてありがとうございました。

(高橋) いえいえ。

(後藤) では松本先生のその後の2014年から2018年までの4年間はいかがでしたでしょうか。

(松本) 覚えていますのは、次期所長に内定された時に、高橋所長と理事長ヒアリングを受けた時でしょうか。高橋先生の時に同席したことがあります。私が所長になってからはヒアリングが2回ありました。そこにどういう方々が並んでいたのか、詳しくは覚えていませんが、理事の一部に加え、事務部長クラスが並んでいました。ヒアリングにあたっては、高橋先生が所長の時は2人で参加したのですが、私が所長の時は1人だけで行われました。

そこでは他の研究所の所長も研究所に関することを説明していました。理事長が出席された折に、研究所の予算が300万円で固定されてい

る状態、いわばゼロシーリングがずっと続いており、もっと活発化しろと言われてもそれではできないんじゃないかというようなことを言いましたら、必要なお金は出すと言われました。ちょっと耳を疑ったんですね。ゼロシーリングというのが絶対的なものであると思っていたのですから。白山の再開発はもう終わっており、新たにここに建物を建てるということもないでしょう。他のキャンパスの整備にお金がかかるでしょうが、必要があれば予算の増額も認められるかもしれないと思いました。それが実際に可能になってきたというのが、大きな変化だったと思います。

(後藤) いわゆる特別事業に関わる予算のことでしょうか。

(松本) 経常予算においても300万を超えていくことが可能になりました。それから予算関係では就任して3年後の話なのですが、研究所が現在の場所に移ったことにともない、あちこちで廃棄されていた書架をもらってきて並べていました。その内の一つの扉が開かなくなり、これは困ったということになって、書架を次年度の予算で申請したいが、そうすると予算使用が窮屈になるし、困り果てました。研究推進課に率直に相談したら、経理財務の方に書類を出すという、非常に前向きな対応をしていただきました。その結果、経理財務の方で考えてくれまして、書架を設置することができるようになったんですね。これは言ってみるものだと。多分ダメだと思ったのですが、必要があればお金をつけるよという理事長の言葉がもう各事務の方に浸透していたのかな、と実感しました。

次に、研究所内の充実を図るために、前所長の方針を継承して研究所パンフレットをいろいろ作りました。この外国語版ですが、これは後藤先生が海外へ行ったときに外国語版のパンフレットがあったほうが良いと強くおっしゃっていたこともあって、中国語の簡体字・繁体字版、英語版、韓国語版を作りました。また、研究所のホームページも各言語で紹介しました。学内でも複数の言語でホームページを作成したというのはやっぱり先駆的だったんじゃないかと思

います。

それともう1つ自負しているのが、長期にわたる研究活動の大きな成果といえる華陽国志研究です。華陽国志の研究が25年にわたって絶えることなく行われて、その訳注が最後までまとめられて1冊出版されたわけです。これは研究所の歴史の中では一つ大きな遺産でありますので、他の方に知っていただく方法を考えなければいけないと思っています。

(後藤) その通りですね。

(松本) もう1つありました。高橋先生が言われました、専任教員が2つの研究所に所属しているという問題です。私が所長の時にそれが廃止されました。というのは、3つの研究所に所属しなければならないという状況が他所に出てきて、それでそのルールはなくなりました。

(高橋) そもそも2つの研究所に所属しなければいけないというのではないのですが、勝手に義務であるかのように受け取っているというのはちょっと考えものですね。

(松本) 新しい研究所がいっぱいできましたからね。

(高橋) いま松本先生がおっしゃった、ヒアリングの件について私は何も触れなかったんですけど、少し説明させてください。

(後藤) どうぞお話しください。

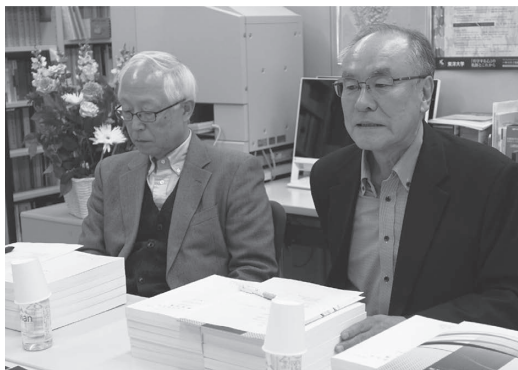
(高橋) 私が所長をやっていた時、2012年だと思いますが、理事さんの中で非常に経費節減が主義といいましょうか、熱心な理事さんがおられました。どういうわけか、研究所の改革というのが思いつくテーマのようで、かなり圧力が加わりまして、その前段階として、研究所の活動について理事会で報告をするようにというお達しがありました。全部の研究所を対象に、研究所ごとに報告することになったんですね。どうせやらなきゃダメなのなら早くやろうということで名乗りをあげて、結構早い段階でやりました。あれは理事会ですかね、評議員会ですかね。

(後藤) 理事会だと思います。

(高橋) あんなにたくさん理事がいるんですね。理事会は初めて出たので。こんなにいるの

かと思ったんですけど。その前で喋らされて、理事長以下全員参加されていたように思いますけれども、それが私の事情聴取みたいな、最初の経験でした。ただその時に、学術フロンティアとか膨大な研究発表を蓄積しておりまして、出版物の一覧表だとか日頃やっている研究や、その当時50数年の歴史を持っておりましたから、こういうことを今までやってきているんだとか多数の研究成果を話すことができたんですね。それは皆さんに結構感銘を与えたと言いますでしょうか、そのように私は思いました。ですので、アジア文化研究所に対する注文みたいなことはほとんどありませんでした。ただ、いま印象に残っておりますのは「もう少しテレビなんかに出てもらいたい。こんなに成果を上げているのならね」という、理事の1人がそんな注文をつけたことですね。テレビでもう少しやってもらいたいみたいな。それは明瞭に覚えております。

ですので、対理事会としては、その頃なんとか潜り抜けたように思います。その後、松本先生がおっしゃった理事会からの注文でしょうか、具体的な研究所改革のためのヒアリングをするんだということが起きて、2014年3月に松本先生と一緒に出席しました。私、その時提出した資料を今日持ってきて、それを思い出しました。その時は松本先生が4月からの所長だと決まっていたので、私と2人で出席したように思います。その時も先程の理事会で説明した文書がありましたので、それを基盤にして説明したように思います。ただ予算の問題ですね、そ



れが非常に私は心配でありました。事実、いま減ったわけですね、予算は。

(松本) いや、増やすことができました。

(後藤) 基本は300万円というベースですね。

(高橋) それは良かったですね。

(後藤) ありがとうございます。松本先生の時代までの理事会ヒアリングについてかなり詳しくお話をいただきましたが、何がどう変わったのか私にはよく分かりませんが、私が担当させていただいて2年間はヒアリングはございません。

(高橋) そうなんですか。

(後藤) アジア文化研究所についてはよく分かったということなのかもしれません。幸いといえますか、幸か不幸かわかりませんが、この2年間理事会への説明というのはいままま来ております。文書によるやりとりが多くなってしまったということも関係しているのかもしれませんが。私はちょうど今2年目を担当させていただいておりますが、先生方がおっしゃいました、研究員の属性の問題、これはもうずっと抱えてきている問題ですね。

(後藤) 2年間、なんかこれというものがあつたかなと振り返ると、これは別テーマとして設定したいと思っているのですが、とにかく外部資金を獲得してくださいという要求が非常に強くなってまいりました。外部資金には常々応募しておりますが、なかなか思うようにはいかないというのが現実です。とりわけ、先程から話題に出てきておりました2002年から2010年まで行いました学術フロンティア、あるいは私立大学の大型研究費というのでしょうか、こういったものが少なくなってまいりましたね。科研費を中心とした仕組みに変わってきましたので、なかなか外部資金の獲得といいますが大きな資金の取得が難しい時代になってきております。そういう中で、大きなものをということをいろんなところから言われてはおりますが、なかなか難しいというのが実情かと思えます。

したがって第1に研究員の問題、属性の問題ですね、それと第2に外部資金の問題、これらを抱えながら松本先生の後を受け継いできたというわけです。現在アジア文化研究所は、

東洋大学の中で国際化という流れに乗るといっても、それを率先するような位置にいます。その中で研究所も国際化に役買わねばならないという思いから、海外の研究機関との提携を進めてはどうかという提案をいたしました。幸い先生方の了解を得られましたので、松本先生の時からですが、中国、トルコの大学の研究機関と協定を結んでまいりました。

次に、毎年発行している雑誌の出版についてです。この出版に関しまして、やはり経費削減という影響を常に受けておまして、見積もりを取って安いところに発注するという形をとっております。研究の特性上非常に多くの言語を使いますし、また写真や図表なども入る雑誌ですので、従来出版に200万円前後かかっておりました。それを何年前ですか、いわゆる相見積もりで安いところに発注するというシステムになりました。ある年、印刷会社さんがものすごく安い値段で受けてくださいました。本学の規定によりまして、安ければいいということで発注しましたところ、とてもじゃないが学術雑誌とはいえないようなものが中間段階できあがり、先生方の校正も十分反映されないという問題を抱えました。その印刷屋さんはその1回限りでということになって終わったのですが、結局そのあと相見積もりという仕組みはずっと続いておきますので、雑誌の発行も今後ますます難しくなるだろうなという印象を持っております。

私の、まだ2年も経っておりませんので反省すべき問題点というほどのものはございませんが、大方そんなところで現在に至っているという状況です。先生方ほかにこれというものはございませんか。

(松本) 後藤先生に変わってから大きく変わったところは、運営委員会をずっと土曜日にやっていたのが平日昼間になったところでしょうか。皆さん集まりやすくなりました。ただ、他キャンパスの人はちょっと難しくなったので、テレビ会議システムを取り入れたりましたね。

(後藤) 1回やりましたね。なかなか土曜日も

忙しく、運営委員全員が集まるのも難しくなってきました。本当は長い時間をとっていろんな議論をしたほうがいいのですが、これももう難しいというのが実情でしょうね。これは研究者の多様性の問題がありますので、こういう様々な分野・学部に所属している方々が1つの研究機関で一緒に議論するというのは本当に難しいという気がします。このような運営の仕方が良いか悪いかというのは、また次年度以降に考えていただいたほうがいいと思います。

(後藤) さて、ちょっと話を変えてましてというか、戻りまして、共同研究というのが研究所の一つの柱になります。もう一つは研究員の個人研究ですが、研究所として組織化していくためにも共同研究が重要となってきますが、この共同研究を行うためには研究員ないしは客員研究員がある種共通の研究テーマを持つということが大事なんですね。そのためには研究員相互の顔が見えていなければいけない。つまりお互いにこの方はこういうことをやっているんだ、彼なら一緒に組める、というようなことが必要であろうと思います。

最初に高橋先生がおっしゃいましたように、研究所改革が行われたあと、顔の見えないというのでしょうか、全く知らない、連絡してもなんの返事もないという研究員が相当数いらっしゃいました。これは現在まで後を引きずってきております。客員研究員につきましても、かつては専任の研究員との関係でなんらかの共同研究をなさっていたのですが、その専任研究員の退職であるとか異動であるとかということにともなって、客員研究員として籍は置いてらっしゃるけれどもなかなか顔の見えないという方もいらっしゃる。こういう問題をどうするかという、それぞれの先生方がその時代に苦慮なさったということですが、その辺をもう一度振り返っていただけるとありがたいと思います。高橋先生の時はいかがでしょうか。

(高橋) 全く成功したとは言えないんですけども、私の所長在任中に研究班は増えたんですね。増えたと言いましても6つあったものが9つになったということなんですけど。それをや

るしかありませんでした。事実、方策がわからなかったのです。専任研究員全員で20名とかいう段階だったら、皆顔が見えていたんでしょうけど、こんなに多くなりますと、あるメンバーを中心に3、4名でもいいから研究グループを作るという方法しかないんじゃないかと思えます。

(後藤) そうですね。研究所改革が行われたのは2001年でしたでしょうか。簡単にかいつまんで申し上げますと、それまで各学部に附置されるという研究所がいくつかありました。学部を離れて存在していた研究所はアジア・アフリカ文化研究所と東洋学研究所の2つであったと思います。学部に研究所を附置しているのは、いくなれば研究費の二重取りではないかというような批判がある先生から起こりまして、その結果学部附置の研究所をやめるということになりました。その代わり、全学的な研究所を作り、その研究所には2カ所まで参加できるという改革が行われました。アジア・アフリカ文化研究所からアジア文化研究所へと名称変更も行われました。アジア文化研究所について申し上げますと、入りたいと言った人の参加は拒むことができないというルールで、一挙に研究員が増えました。

先生も苦労されたように、名前も知らない、顔も知らないという研究員が増えたのはこの時期であったと思います。それまでは私が研究所の研究員になりました時の経緯からいきますと、大体誰かの紹介という形で入っていらっやりました。何らかの会合があると皆で手伝ったものですから、顔が見えていたわけなんです。今はもうほとんど見えないという方が結構いらっやるんだなというふうに思います。

この問題に対応するため、研究班にできるだけ所属していただくなり、あるいは小さくてもいいから研究班を作ってくださいという方向が高橋先生の方で示されました。松本先生の時も多分ご苦労なさったし、今でも学内評価とか外部評価を受ける時に常に指摘されるのが、「これだけ大勢の研究員がいてどうやって運営しているのですか」という問題です。

(松本) 私の所長任期の最初の2年に、附置研究所の所長会議というのがあって、あとの2年はもう開催されなくなったんですが、その所長会議の時にその問題を提起して、研究所の運営委員会は研究所に入りたいという人を拒めないのかということを行いましたら、いや拒んでもいいんだという声が出てきました。それは研究所の運営委員会の細則でそういうふうに決めればいいんだということだったので、今はそういうふうになって変わりましたが、それまではちょっと今お話にあったような状況が続いて、解決の手立てが1つはついたかというところですね。

(後藤) 村松さん、20年以上も前からチケットの手配をしていただきましたし、今もアジア文化研究所ですという形でEメールや電話で手配の依頼が行くと思うんですが、どうですか。顔が見える、見えないということについてなんか感じておられることはありますか。

(村松) 全くその例えがびったりです。というのも、昔は手渡しでチケットをお渡ししていたんです。この研究所も前の木造の研究所も何度かお邪魔させていただいて、先生方とお会いしてお渡ししていました。eチケットの時代になって、もう今ではほとんど皆さんとお顔を合わせずにPDFでお送りして「はいそれでOK」というふうな形になっています。たまに先生方からメールを受け取って、「ご無沙汰してます」とご挨拶いただくんですけど、メールだけのご挨拶であって一度もお会いしたことがないんですが、そのように言葉を使っただけで大変ありがたいと思います。昔はどちらかというと、こちらに来ると、「時間も時間ですからちょっと飲んでいくかい」ということもありましたけれども、そういう機会は全くなくなりましたね。とはいえ、逆にいろんな学部の方、遠い理工学部の先生方からもメールをいただけるので、そういう意味では大変ありがたいと思いますか、生産性は高まっているかと思えますね。

(後藤) 機械と機械の付き合いみたいなものですね。先生方の個性に合わせてといいますか、都合に合わせて「あ、この先生だったらここへ

行くのにこういうルートの方が喜ばれるなあ」といったり、あるいは「この時間帯に出発というのは、本当は先生の場合都合が悪いだろうな」というような、今まででしたら頭の中にほとんど入ってらっしゃったでしょう。

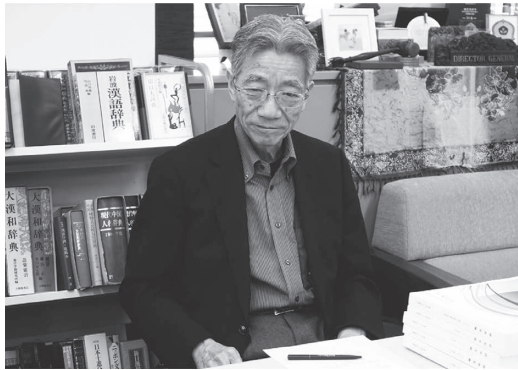
(村松) はい。

(後藤) 10年ぐらい前までは。

(村松) はい。

(後藤) 今はもう、メールのやり取りとか電話だけの付き合いになるとそういうふうなことはほとんどないでしょうか。

(村松) はい。こちらからお聞きしますし、先生方の方にもですね、羽田発・成田発ならどちらがいいというようなお好みみたいなものがありますね。限定的に「このルートで、この航空会社でお願いします」とおっしゃる先生方もいらっしゃいます。ただ、行き先によっては大変運賃に差のあるところがあります。JAL、全日空、それからその他の航空会社によって、倍ぐらいの値段差があります。そういう場合は複数のルートを作って、先生に提示してお決めいただけます、みたいな形でやらせていただいています。



(後藤) なるほどね。そういったところが、知恵の出どころですか。

(村松) いやあ、知恵というか。

(後藤) 一回もお会いしたことがないという方のいろんな準備をしなければならないんでしょうから大変だろうなあと推測します。

(村松) やはり2回3回承っていると、大体の傾向といいますか、そういうのは掴めますね。

(後藤) そうですね。ありがとうございます。研究員の問題というのは本当に研究所として一体感をどう持っていくかということを考える時に常に考えなければならない問題なんですね。結果的には、研究分野・研究対象が非常に多様であるから、なかなか顔を合わさない方もいらっしゃるんだなあというところで、今まで来ているのでしろうし、これからもそれぐらいのゆるやかなところがいいのかなというふうには思いますね。

(高橋) そうですね。

(後藤) なんかあったときはできるだけ集まっていたきたいですね。現に年に1回年次集會を開いておりますが、そういう時はぜひ参加していただきたいなあ、今後のためにも思っております。

(高橋) 私が所長の時に気をつけていたのは、どんな人材がいるか分からないという点に留意したことです。潜在している能力を持っている人がいるということですね。

(後藤) 絶対いらっしゃると思いますよね。

(高橋) です、切っていくんじゃなくて、参加してもらおうという、その基本姿勢というのが必要じゃないかと思いますね。

(後藤) そうですね。この問題は将来にも出てくるでしょうから、また折に触れて先生方のお知恵を拝借できればと思っております。

(後藤) さて、次の問題に移らせていただきたいと思います。2001年の研究所改革が始まって以来ずっとといってよいぐらいと思うのですが、外部資金による研究ということを言われ続けております。外部資金というのは大きく分けて2種類あると思います。1つは学内の外部資金というのでしょうか、競争的な学内の資金。これは井上円了の研究助成がございまして、研究所としての共同研究、それと大型研究、これが主だった学内の競争的外部資金であろうと思います。もう1つは学外になりますが、科研費であれ、あるいはその他の資金であれ、こういったものの獲得が求められております。特に学内の井上円了研究助成の場合は共同研究が必須になっておったかと思えます。今、アジア文化研

究所では、かなり学内の共同研究の資金をいただいております。学内であれ学外であれ、競争的な資金の獲得についてやはり歴代の所長たちもご苦労なされたことだろうと思います。高橋先生、いったん休養の時期であったということですが、苦労されましたでしょう。

(高橋) この分野は私個人的には大変不得意でありまして、獲得してくれと言うことができなかったんですけれども、幸いアジア文化研究所には能力に長けている人がおりましたので、私の任期中にも科研費あるいはプロジェクトの研究資金を獲得していただいたというふうに思っております。

(後藤) プロジェクトによっては、研究所長名で申請しなければならないものも確かあったんです。いま挑戦しながらなかなか合格通知をもらえないでいますが、私学振興財団も2回続けて申請いたしました。研究所を母体としたものとして、大型研究というものがございまして、これは2回いただきましたかね。松本先生の時であったと思いますが、新たに条件がついてきまして、科研費Aに応募することが求められました。Aというのはなかなか難しいものでして、ほとんど学会単位で申請するものですから、なかなかこれも次へ続かないというジレンマを抱えております。

その他、研究員が数名参加して井上円了研究助成による研究所内の共同研究ということで、高橋先生の時にも、相当数いただいております。大型研究を紹介しますと、松本所長が代表者になる「アジアにおける国境を跨ぐ生活スタイルの研究」、これが2015・16年です。私が所長で代表者ということで松本先生の後を受けて申請したのが、「一带一路経済政策による中国経済の海外展開とその関係諸国地域に及ぼす文化的影響」というものです。しかし科研費Aの申請が条件となってくると、今年度大型研究を申請することが難しいというのが現状です。この研究所といたしましてはかなり多数のプロジェクト研究をやってきたわけですが、その促進という意味で松本先生の任期中はいかがでしたでしょうか。

(松本) 研究班の中で私が代表を務めさせていただきしたのは、トランスナショナル関係の共同研究班です。研究所全体でも科研費を取得される方が多いのですが、私の共同研究班でも何人かの方が取得されています。科研費は直接的にはプロジェクトには繋がりませんが、研究計画などで科研費の成果を実績という形で生かすことができたのではないかと思います。

やっぱり最初に後藤先生が言われたように、文系で大型研究費というのは科研費関係でも応募できるところが少なくなっています。科研費Aが一番大きな金額ですが、それぐらいしなくなっているような状況です。また海外の基金に応募するというのもなかなか難しいですね。科研費を取得される方が研究員の中に多くいらっしゃる結果、間接経費を元にいろいろな活動ができています。そのような活動を支援する場所として研究所を利用させてもらっています。それを実績としてまた新たな共同研究に応募していくというサイクルができていように感じます。

(後藤) 研究所プロジェクトは研究期間3年以内というものでして、1年間に200万円以下の資金提供を受けることができます。本研究所では何件も取得してきましたが、同じメンバーで繰り返し取得していることが研究所運営上もちょっと問題かなと思っておるところです。できれば、研究班の代表者それぞれがプロジェクト研究に応募されることを願いたいものです。科研費Cは個人研究が中心ですが、すでにCを取得しておりますと、大型研究の代表者になれません。その先生がCで応募すれば合格ラインに達するはずなのにあえてAで応募したばかりに落ちこちなければいけないという、こんないろんな問題を抱えているのがこの学内の研究費、特に大型研究ですね。それでも年に平均しまして、2つないし3つ程度のプロジェクトが動いているというのが現状であります。もう少し学内資金も大勢の方が応募していただいで研究所を母体に活動していただければありがたいと思っておるところです。郝先生、プロジェクト研究につきましてお感じになった点はありま

すでしょうか。

(郝) 確かにこのプロジェクトで活動するにあたって資金の確保はまず重要な問題となります。中国班につきまして感じた変化を申し上げますと、海外との共同研究を行う際には以前は招聘費用がかなりかかっていたのですが、しかし近年、少しずつ状況が変わってきています。中国側が資金力豊富になってきており、場合によっては、招聘費用はこちらが出さなくてもよいというような状況になっております。そういう意味では先程松本先生のお話しの中にも出たのですが、日本国内の資金を申請すると同時に海外と共同でプロジェクトを立ち上げていき、海外の資金申請も行っていくことが課題となるように思います。

(後藤) そうですね、科学振興財団で募集しておりますのも、外国の研究機関との共同研究です。対象国に限定はありますけれども、こちらから10人ぐらい、相手側から10人ぐらいというふうな組織を作ることができれば応募することができますので、これからはかなりよい方法かなというふうにとずっと私は思っておるところです。

(後藤) さて時間の都合もございますので、次の問題に移らせていただきたいと思います。研究成果、あるいは活動を外部に発信するということが今の時代求められております。高橋先生が理事会との面談でテレビに出たらと言われたこともおっしゃっていましたが、マスコミで目立つことがいいかどうかは別として、何らかの形で外部に発信していかなければならないと思います。私どもの主な発信手段というのは出版物とホームページです。後者は随時書き足して行きまして、今の活動状況を知っていただくようにしております。

出版物としましては、まず研究年報ですが、これは毎年継続して出版してきております。学術フロンティアの時に用意いたしましたISBNをまだ相当数持っておりますので、それを利用して、アジアンリサーチペーパーシリーズというものを三沢先生の提案と努力で、それぞれのプロジェクトが発行するというような形で外部

に発信する努力をしております。

それに加えて、これも年間でいえば5、6本、あるいはもっと多数になるかと思いますが、シンポジウムを開催しております。特に昨年は能海寛生誕150周年の記念シンポジウムをアジア文化研究所が音頭を取る形で理事会から別途予算をいただきまして、島根県の方にあります能見寛の研究会の方々、それと東洋大学の博物館の協力をいただきまして、シンポジウムを開催させていただきました。

こういう形で外部に発信する努力は重ねてきていますが、なにぶん学術の研究というのはテレビで何かをやるという分野でもありませんので、むしろ私はこういう地道な活動が一番いいと思っています。こんな形でこれからも進めていくことはできるんですが、なんかそれ以上にもっとこういうことをやればアジア文化研究所の活動が社会で認められるのではないかとのご提案などございましたら、うかがいたいと思います。

(高橋) 私の時に力を入れたのが年報の体裁を整えるということです。これはちょっと自慢できるかと考えています。従来かなりラフだったんです。よくいえば、それぞれ発表者の主体性に任せるといって、体裁がかなり不統一なところをですね、私が担当した時に運営委員の齊藤先生と有沢先生が非常に熱心に体裁を整えてくださいました。以前よりも見違えるように統一的な体裁になったんじゃないかと思っています。

もう1つは、研究所をかなり自由な論文発表の場にしてもいいのじゃないかと考えました。一般の雑誌は400字詰め50枚だとか、枚数を制限されることが多いのですが、研究所はもう少し沢山書きたい人や発表したい人にもっと柔軟に対応していけばいいのではないかとずっと思っておりました。その提案により、原稿用紙400字詰め80枚までという基準が認められ、今でも続いています。所長としての成果だと感じております。

アジア・アフリカ文化研究所からの長い伝統を持っておりまして、60年に及ぶ蓄積があります。それが一番大事なことだと思いますね。我々

の歴史系の分野でも東洋大学のこの雑誌がよく知られていますので、このような伝統を大事にしていっていただきたいと思います。

(後藤) 松本先生、いかがでしょうか。

(松本) 研究年報については、京都大学でずっと編纂してきた東洋学文献類目、あそこに本研究所の研究年報に掲載された論文が、全てではないのですが再録されています。あそこに再録されてあるというのは一定のレベルに達していることを示しているのかなと思います。それから、研究年報の学術情報リポジトリ、オンライン公開が始まりました。高橋先生の時でしたでしょうか。

(高橋) ええ、私の時に始まりました。

(松本) それ以前の著者に許諾を求める必要がありまして、まだ連絡先を徹底して調べ尽くしていないのが残念です。執筆者本人が亡くなっている場合がたくさんありますので、遺族の方に連絡を取らなければならないのですが、それがずっと課題となっています。それが徹底できれば、創刊号から相当部分がオンラインで発表できるようになるのではないのでしょうか。

それから、以前までは研究年報はずっと縦書きが基本で編集してきたんですが、やっぱり段々横書きで原稿を書く人が多くなって、縦横が複雑に入り組んでいた状態になってきたので、52号から横書きをベースにして編集していただくようになりました。

(後藤) ありがとうございます。やはりここが研究所である以上、学術雑誌を定期的に発行するというのが一番の務めであります。歴代の所長の先生方にはいろいろ改善に取り組んでいただきました。本当にありがとうございます。歴代の所長の先生方は研究者としての矜持をお持ちの方々ですので、本当に立派な雑誌ができてきたと感謝しております。学術雑誌以外の発信手段というのを私どもなかなか思いつかないのですが、外国の経験といいますか、本来外国のほうが専門の、郝先生いかがでしょうか。

(郝) 高橋先生からのお話がありましたが、国際化という観点から見た場合は、やはり電子化、デジタル化はこれから一層推進していかな

くてはいけなんでしょう。印刷物にはまだかなりのニーズが根強く存在しておりますが、流れとしては、やはりデジタル化を進めなくてはいけないというふうに感じております。私が参加している学会誌のほとんどは電子化が進んでおります。そのメリットは瞬時にというか、少なくとも数ヶ月以内に公開して、しかも全世界どこからでも入手可能であるということです。電子化すれば、容量もかなり大幅に増えますので、大部の論文も可能になるでしょう。

(高橋) 紙がないわけですか。

(郝) すでに日本の学会の半分は紙がない状態です。

(高橋) 中国でもそうですか。

(郝) なくなってきました。いま中国ではまずインターネットに公開することにともなって、知的所有権といいますか、いわゆる盗用がすぐにチェックできるようになっています。

(高橋) 盗作かどうかが分かるのですね。

(郝) そのメリットは世界を超えてどのようなテーマで一番研究されているか、成果を上げているかという情報を早く把握することが可能になります。

(村松) そうですね。タイミングを掴むというのが大事になってきますね。

(後藤) 雑誌の電子化という問題は数年来検討を重ねてきておるところです。本学の他の研究所、他の学部などの紀要の動向も見ながらですね、ここ数年の間に判断していかなければならないことだろうと思っております。

シンポジウムを開催する機会も非常に多いのですが、これをもう少し世の中に発信できないかと思います。WEBでやっている、あるいはチラシ、印刷物を配布していくということもあるのですが、もっといい方法がないかなという苦慮しております。村松さんは、大学がこういうふうなことをやっているのを見られる機会もあるかと思うのですが、広報の方法について、もし何かアイデアがあれば教えてくださいませんか。

(村松) アイデアというよりは、私が東洋大学に興味がある場合は、やっぱりインターネッ

トで探し出すとかですね。例えば箱根駅伝でどんな活躍をされたかというのを見たりしますね。先程理事会から要望があったテレビの露出度、これはかなり大きんじゃないかと思えますね。そうすると、最初は興味本位であっても、学術的なものにも関心が向くことがあるでしょう。

(後藤) 昔、学術フロンティアをやっていた時にインドネシアでシンポジウムをやりましてね。それが現地の新聞に大々的に報道されたことがございました。それを持って帰ってきて「こんなにやったんだぞ」という説明をした気がするのですが。それで思いましたのはですね、現地の新聞といっても実は中ジャワ州の人口100万人ぐらいの町の新聞なんです。いわば地方新聞です。

いままでシンポジウム、あるいは研究会は東洋大学の学内でやってきたんですね。東京の白山という地域が関係する新聞・マスコミというのはいわゆる全国紙がカバーしている地区ですね。毎日新聞や朝日新聞という全国紙が扱ってくれるかといえば、よほどのことでない限り扱ってくれない。フロンティアの時に沖縄でシンポジウムを開催したことがありました。当時所長の比嘉先生のご尽力もあったのですが、沖縄のテレビ・新聞で扱ってくれました。

そんなことを考えますと、テーマによっては研究所が持っている費用から国内の出張費ぐらいはなんとか出せるようにみんなで努力して、少し地域に関係するテーマのシンポジウムなどを企画された時にはその地域に出向いて行い、現地のマスコミ媒体には当然連絡を入れて応援していただくようなことをやらなければいけない。あまり学術的ニュースのないところで開催するのも1つの手かなというふうに思っておるんです。それくらいしか、いわゆるマスコミなどに取り上げてもらう機会というのは思いつきません。

(後藤) さて、もう一つ将来を考える上で一番の課題は国際的な連携、国際化という東洋大学が標語にしておりますテーマに沿って、どう活動していくかということだろうと思うんで

す。今までもアジア地域の様々な研究者あるいは研究機関との連携、ないしは現地調査、現地報告など数々行ってきたわけですが、組織として連携を深めていくということを松本先生が所長の時に始めるようになりました。松本先生、それまでの華中科技大学との関係もありましたでしょうが、その国際化の進展について先生の時にお進めいただいたことを少し紹介していただけますでしょうか。

(松本) 華中科技大学の名前が出ましたが、東日本大震災の時に華中科技大学からすぐに「私たちは心をつなげています。頑張ってください」と、アジアや日本語に関係する学科の先生たち、学生たちが大勢揃った集合写真が研究所に寄せられて、それでそれを研究年報に野間先生が紹介されました。同大学との交流に尽力された針生先生がそのあと亡くなって、華中科技大学から針生先生の追悼写真集をわざわざ持って来られました。姉妹関係の協定すら結んでいないけれども、研究者と研究者の間関係、それがずっと続いていて、華中科技大学との交流は未だに東洋大学のこの研究所のメンバーの世代が交代しても引き継がれています。

別の問題になりますが、研究年報の総目次を50号の時に作りまして、その後ろに著者名索引を入れてあります。これを見ると、外国人名が相当の割合で出てきますので、近年じゃなくて昔から海外の方にとずっと執筆してもらっていたというふうに思います。中国、韓国の人が多いんですが、それ以外にも南アジア、イスラム圏とか、欧米も少しあります。たくさんの方の名前が載っているんで、そちらの方々が本研究所を懐かしく思って訪ねてこられた時に、やっぱり研究所に同じ人がずっといて対応できるということがあればと思います。実は、95年にカナダのモントリオールに1年間派遣されておりまして、この夏にまた行きましたら、その時お世話になった事務職の方がまだいらっしゃって、懐かしく握手をしてくれました。国際交流の重要性を思いますと同じ人が研究所にいるというのがかなり大事なのではないかと思います。

(後藤) それはそうですね。本当はそれが大事なのですが、それこそ2000年ごろから、短期雇用の、いわゆる契約制の形になりまして、事務スタッフや教員もそのような形になってきております。本当に今は松本先生が紹介していただきましたように、この研究年報の著者名を拝見しますと、いかに研究所の従来の研究員の方々が外国の先生方と交流を深め、また学術上の交流を深めていらっしゃるかをすぐ見てとれます。あえて今国際化という旗を振らなくても、この研究所がアジアとの協力という意味では最先端にいること、これは間違いのないところであろうと思います。

近年、海外の研究所との研究協力協定というのを2つ結んでまいりました。1つは中国の遼寧省にごぞいます遼寧大学日本研究所、もう1つはトルコのアンカラ大学のアジア太平洋協働研究センターと協定を結びました。実際の活動といたしましては、中国遼寧大学とは一帯一路研究で共同研究を行いシンポジウムに参加して報告する機会を得ました。アンカラ大学の方は、今年度動いておりますが、「パリ講和条約100周年を契機として」というテーマで共同してシンポジウムを開催いたしました。また今月、三沢先生がアンカラ大学へ行きまして、これに関係するテーマで報告をしてきたということをうかがっております。いうなれば名ばかりの提携ではなく、お互いに実質的で意味のある研究協力を今進めてきておるところです。

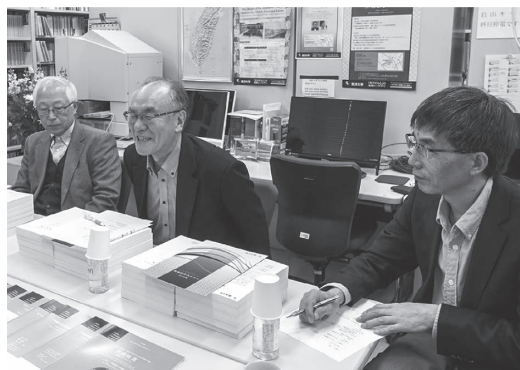
遼寧大学に行って報告をしていただきましたが、郝先生、国際協力のあり方について、先生のご経験からなんか将来に役立つような方法がございましたら教えていただけるとありがたいと思います。

(郝) これまでの経験というか、記憶も含めいくつか問題提起していきたいのですが、1つは先生方のお話にもあったように、アジア文化研究所の場合はずっと前から国際的共同研究が進んでおりますが、そのことを外に向けて発信することの方が少々弱いという感じがします。

アジア地域の経済をはじめ社会・文化は固有性を維持しながらも、他方でグローバル化の影

響を受けて一体化が進んでおります。こういう点についてそれぞれの国の研究所は共通する問題意識を持っていると考えますので、アジア文化研究所を拠点にして交流や共同研究を進めていけば、本研究所もそのプレゼンスが高まっていくのではないかと思います。

個別のプロジェクトや研究班が、国際化を進めてまいりましたが、今後の課題としては、研究所として、国際的なテーマを設定して年に1回ぐらいシンポジウムを開催するというのはいかがでしょうか。



(後藤) 検討に値する提言ですね。松本先生、他にごぞいますでしょうか。

(松本) 研究員も多く、また研究グループも沢山あり、グループ単位ごとで見ると国際交流をすごく継続的にやっています。研究所全体で何かをするということになると、逆に分裂してしまう恐れがあります。研究所全体のシンポジウムの時に、これまでグループでやってきたことを知りあう機会がありましたけれど、具体的にはグループごとに発信してもらって、研究所の中でそれを共有するというのが一番近道かと思います。

(後藤) 私も研究所協定は2つないし3つぐらいが妥当であろうと思います。相当数の協定が可能ですが、共同研究の実を上げるにはお金が必要です。そのために、プロジェクト予算を持っている、あるいは派遣予算を持っているというところでないと招聘ができないし、あるいは相手国に行くこともできません。研究所として交流のために自由に使える予算というのはほとん

どありません。雑誌の出版、経常的な経費、これを使いますとほとんど残高がないというのが現状です。

したがって、1つの研究所ないし2つの研究所と安定して研究者の相互派遣を行うというのは非常に難しい。「プロジェクトの予算を持ってきて、プロジェクトの期間はよろしくお願いします、終わったらさようなら」というのが現状なんですね。それを少し安定的に維持することを考えますと、先程出てきました雑誌の電子化ですとか、要するに削減できる費用をどこかで削減しておいて、その代わり年間に一定の金額を協定研究機関との共同研究に使うようにしなければなりません。つまりプロジェクト予算がなくてもここに予算を使えるというような方向を将来考えていかなければいけないでしょう。外部資金を取得してくださいというやり方でいきますと、「資金のあるうちはよろしく、お金がなくなったら終わりです」という、お金のあるうちの付き合いということになってしまう。これがちょっと悲しいなあと思いますので、研究所として重点的に行うことを中期的に、3年ないし5年のタームで皆さんと相談して決めて、「今年度はベトナムやりましょう」ということであればベトナムのそれなりの研究機関とやってみる。その際、専門でない方も「こういうテーマでお願いします」という形で入れるような仕組みというものを考える。そうすると、いわゆる顔の見えない研究員の先生方も少しはこちらを向いてくださるかなというふうに期待しているところです。これはまた運営委員会などで検討させていただければと思います。

本研究所には多様な研究員がおりますので、様々な国の研究機関との共同研究についても言語面ではさほどの不自由は来さないでしょう。外国語の得意な方には応援していただくということになりますが、その辺は今後とも皆で協力し合って進めていければと思っております。

本日は長い時間にわたり、有益なお話をうかがえました。ありがとうございました。本日お集まりの皆さまの諸提言を今後の研究所運営に反映させていきたいと思っております。お見守りくだ

さい。